
真・恋姫†日常

喜助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†日常

【Nコード】

N6914J

【作者名】

喜助

【あらすじ】

真・恋姫†無双（原作）の蜀ENDからのアフターストーリーです。なるべく原作に忠実のつもりで、戦闘シーンはほとんど無し。ぼのぼの&らぶらぶ主体のお話です。各キャラに焦点を当てたお話を展開していきますので、お気に入りのキャラだけ読んでくださっても全然OK。拠点イベントの延長みたいなノリです。

また、思いつき初心者ですので、駄文やら内容がつまらんなどなごあると思いますが寛大な心で読んでいただければ幸いです。

注・本編は各キャラ真名で表記しています。正式な武将名は公式H

Pなどを参考にしてください。

その1 桃香編 〱青天の霹靂〱（前書き）

最初はやはり桃香のお話です。

その1 桃香編 〱青天の霹靂〱

魏、呉、蜀による三国同盟からしばらくして、蜀に集まった魏や呉の要人たちがそれぞれの国に帰っていったころの話である。

「ふあああ〜〜〜」

早朝、大きな欠伸と共に桃香は目を覚ました。乱れた赤く長い髪を手で押さえながらゆっくりと起き上がる。本当はあと5分といつて2度寝したところだが、そうすると蜀の將軍であり義姉妹である愛紗が怖いので我慢する。

「ん〜、眠たいけど……遅れたりすると愛紗ちゃんたちが心配するしな〜よいしょっと……」

全体的にほんわかとした雰囲気を持つ桃香はのろろと寝巻を脱いでいく。その体つきは美しかった。細い足首、しなやかな太もも、艶めかしい肌など、見事な裸体をさらしていく。そして、なによりも目を惹くのがたわなにふくらんだ乳房である。この時代の胸の平均はわからないが、周りと比較すれば間違いなく巨乳の部類に入る。義姉妹である鈴々からは「おっぱいお化け」などと言われているが、桃香はそれほど気にしていない。なぜなら、彼女の想い人であり天の御遣いであるご主人様こと本郷一刀が褒めてくれるからである。出会ってからこれまで、何度も同じ床で愛し合ったのだが、その度に一刀は褒めてくれる。ちよつと、強く揉まれるとわずかな痛みとそれに勝るかいk……。

「はっ、いけないいけない。早く着替えなきゃ」

と、朝っぱらから思考が桃色に染まってきたことに気づき顔を振る。寝巻を脱ぎ終えた桃香は急いで服を着ようとして、それに気付いた。いや、気付いてしまった。

「あ、あれ……なんか、キツイ……？」

上半身、特に腰あたりに感じた違和感。ちゃんと服は着れる。しかし、腰回りに妙な圧迫感を感じてしまう。上半身もそうだが、なにより下半身を覆うスカートが特にキツくなっている気がする。

「え……え、き、気のせいだね。うん。そうだ、お腹に空気がたまっているだけだね……？」

自分で言っておきながら疑問形になってしまう。その事実を全力で否定したいのだが、頭のすみにこびりついて離れない。

（ふ、服はこの前採寸してもらって新調したばかりで……昨日は、皆で宴をやったたくさん食べて……政務にかかりきりだから運動なんてほとんど……）

考えれば考えるほどそれを肯定する事柄しか浮かばない。

「ほ、本当に、ふ、太っちゃたかも……」

この世の終わりみたいな顔をした桃香はその場に立ち尽くしてしまった。その30分後、いつまでも部屋から出てこない桃香を心配した愛紗が来るまで呆けたままだった。

「はわわわ。で、では今日の会議はこの辺で……」

「あわわわ。と、特に意見がなければ解散で……」

蜀が誇る軍師である朱里と雛里の声が会議室にむなしく響いた。周りからは誰も意見を出さない。そもそも、会議自体最低限のことしか言わなく終始シーンとた雰囲気であった。その原因はもちろん、蜀の王である桃香である。遅れてきた上にずっとうつむいたままで、案件にも一言二言しか発言しなかったのだ。全員がいぶかしむなか、ふらりと立ち上がりそのまま立ち去ってしまう。その後ろ姿に、どんな顔とした黒い靄を見たのは気のせいではないだろう。

「それで、主。一体、桃香様に何かしたのですか？ いや、したのでしょうか？」

桃香が立ち去った後、真っ先に口を開いたのは星であった。白を基調とした着物に袖に蝶の翼をあしらった腕を胸元で組む。その目はこの会議場唯一の男性に向けられていた。

「えっ！？ いきなり俺犯人決定なの！！」

そう叫んだのはぱりえすてるといふ素材の白い服を着た本郷一刀。二枚目とはいかないまでも、背も高くそれなりに整った顔は驚愕を表している。

「ご主人様……覚悟はよろしいですか」

「この色情魔！ 桃香様に何をしたあ！！」

長い黒髪に桃香に負けないくらいの豊かな胸をした愛紗と、男勝りな顔で桃香をある意味でとても慕っている焰耶。二人とも眉を吊り上げぶるぶると怒りで震えている。焰耶にいたっては自慢のこん棒である鈍砕骨を握っている。生存本能が激しく継承を鳴らし一刀はすぐさま弁解する。

「ま、待て！ 落ち着け二人とも！ 誤解だ！ 無実だ！ まずは話を聞いてくれ！！」

両手を前で振り、全力で身の潔白を証明しようとする。一騎当千の猛者である彼女たちにかかれば一般人である自分など瞬殺である。

「そうよ。愛紗ちゃん。まずはご主人様の話を聞きましょう」

「焰耶！ お前も一角の将ならもつと落ち着けい！！」

血気盛んな2人を諫めたのは年長組である紫苑と桔梗。子持ちであり母性溢れる紫苑と剛毅な性格で喧嘩好きだが落ち着きを持った桔

梗の二人は、若年組の手綱を握る役割にある。

「そうなのだ。愛紗はお兄ちゃんのことになるといつもムキになるのだ」

「そうだよ、ちょっとは落ち着けばーこれだから筋肉女は困るんだよね」

さらに追撃をかけるんは小柄でトラの髪飾りをした鈴々と、オレンジの服とキュロット風のズボンをはいた蒲公英である。蜀の中でも年少組に入る二人にまで言われた愛紗と焰耶は、ぐぬぬぬ……と唸りながらも拳をおさめる。

「んでもなー、桃香さまがあそこまで落ち込むなんてよほどのことじゃないか？」

「ああ。あそこまで落ち込んだ桃香は見たことないな」

首をかしげるのは、蒲公英の従姉である少し太い眉をもった勝気な翠と桃香との付き合いが深い白蓮だ。

その言葉をきっかけに、全員の視線が一刀に集まる。じーっと疑惑の眼差しがぐさぐさと突き刺さるが、一刀はどうしようもなく居心地が悪い。

「ほんとにないんだよ……ここ最近桃香とは満足に話すこと事態少なかったし……」

首を傾げ顎に手を当て困惑する一刀。その顔は本気で心当たりがないように見える。

「本当にはないのですか？ ご主人様」

「うん」

「本当かつー!」

「う、うん」

「ほんとにほんとなのか？」

「ほんとにほんとに」

「はわわ、その、心当たりも……？」

「………ない………はずだ」

若干間があつたが、それでも彼は首を横に振るう。そもそも、一刀のせいだとしても本人のしらないところでの事であつたらどうしようもない。とはいえ、本気で困惑する一刀に一同はとりあえず彼のせいではないと信じた。

「しつかしよー、じゃあ何が原因なんだ、ご主人様？」

「いや、お姉さま。ご主人様でもわからないから皆悩んでるだつてば」

「えーと、その……先ほどご主人様がおっしゃったように、桃香様と疎遠になつていたからでは……？」

「でも、雛里ちゃん。それは今までのことを考えれば可能性は低いのではないかしら？」

「そうじゃの。紫苑の言う通り、お館様は多忙なうえ少々色を求む傾向が強いですからなあ」

「えっとさ、桔梗。それを俺がいる前で堂々といわれるとなんか居心地悪いんだけど」

「だが事実だろう！」

「焰耶の言う通りですな。そもそも私とて昨日の逢瀬は実に久しぶりでしたのだから」

「っ！！ ご主人様！ 今の話は本当なのですか！」

「星ばかりずるいのだ」

「待て、愛紗、鈴々。主旨がそれ……」

「あら、ご主人様つてばお盛んですわね。その前の日はあんなに激しかったのに……」

「つて紫苑何その艶めかしい視線は！ いや、その発言は今ここですべきでは……！！」

「ご主人様あゝ……そのお話をゆうくりとお聞かせ願いたいのですが……」

「いかん！！ 朱里の背後に桃香とは違う意味の黒い霧が見える！？」

「ねえ、ご主人様！。今度また一緒に遠乗りに行こうよ。お姉さま抜きの二人きりで」

「なっ！ 蒲公英なに抜け駆けしてんだ！ あたしだってなあ」

「お前ら！ いい加減にせんか。そもそもご主人様には仕事が……」

「どうせ、手伝いだとか何とかで傍にいるつもりだろう？ 愛紗もなかなか……」

「どういう意味だ、星！」

「にゃー！ ずるいのだ〜！！」

こうして、主旨がずれまくった上になぜか一刀が全て悪いとの結論に、本人は心の中で涙を流した。

結局、桃香の絶不調の原因はわからずじまいなので、原因の究明と解決は一刀を中心に全員があたることとなった。

続く？

その1 桃香編 〱青天の霹靂〱（後書き）

最初に書いてて思いました。キャラが多いですね……………ホントに。蜀だけでも多くのキャラがいますが、あくまで今回の主役は桃香なので次からは桃香主体でいくつもりです。連載は不定期のつもりです。ので、気が向いたらぜひ読んでみてください。

その2 桃香編2〃青天の霹靂〃（前書き）

今回は桃香Onlyです。最後に少しだけ他キャラクターが登場します。

その2 桃香編2 青天の霹靂

「うううーどーしょー……………」

この世の終わりだと言わんばかりに嘆く桃香。今は服を脱いだ下着姿である。そして、細い指で体の至る所をぶにとつまんではため息をつく。

「やっぱり…………前に比べてぶくぶくしてるよ」

しかし、なんといっても注目すべきは腰の部分。特に腰骨の上、体の両脇の下部分。そこには、少しだが、確かにつまめるくらいの贅肉が存在していた。以前はここまでなかったはずだ。それが突然こんなになるなんて、まさに青天の霹靂である。

「こっ…………こんなに太ってたなんて…………そんな」

しかし、こころあたりはいくらでも思い浮かんでしまう。

・机仕事ばかりで運動など全くしていない。

・よく食べ、よく飲む。特に酒宴の時、酔っ払った自分のはめをはずすことが多く、食べ過ぎ飲み過ぎになる。

・街に遊びに歩きに行っても、町の人々がくれるお裾分けをいつも完食してしまう。おまけに甘いものが大好き。

駄目だ。これで太らないほうがどうかしている。特に桃香自身の変化はないが状況が違う。昔は戦が多く精神的にも緊張していた。だ

が今は三国同盟を結び、心のどこかで安心したのが原因なのかもしれない。

何はともあれ、太るということは、乙女にとって絶対に受け入れがたい出来事である。乙女としてはもちろんだが、桃香にはもっと明確な理由がある。

（ご、ご主人様にみ、見られたら……どどど、どうしよう……）

一刀の存在である。他人に見られるのは勿論嫌だが、好きな人に見られる、ましてや気付かれることのほうが何倍、何十倍も恐ろしい。

「も、もし、嫌われたりしたら……あ、ああた、あたし……」

あの優しいご主人様がそんなことで自分を嫌うはずがないとはわかつていて。それほど、短い付き合いでもないし、そんな薄っぺらい気持ちはお互いがない。

でも、でもでも。

男の人ならば、当然太っているより痩せているほうがいいに決まっている。

もし、今のまま同じ床について……

「ん？　なんかいつもより重く感じる……？」

「そ、そう？　き、キノセイジャナイカナ？」

「それに、桃香いつもよりやわらかいよ」

「え、えっと、その……」

「……ひょっとして、桃香、太った？」

「うっ！」

「大丈夫。どんなに太っても、子豚さんみたいになっただとしても桃香は桃香だし俺は俺だぜ」

「いやああ！！ 絶対にいやあああゝゝ！！！！」

頭を抱え絶叫する。想像するだけで恐ろしい。

やさしさは時に残酷な刃と化す。

それなら怒って。むしろ怒ってください。

好きな人からそんな言葉を言われたら、自分は恥ずかしさで死ぬ。死因は羞恥死。いや、そんなものがあるのか知らないが間違いなく立ち直れない。

それでも自分を見てくれるならまだいい。いや、ホントはよくないけど。最悪の場合、自分から離れて行ってしまうかも。

「太ってる桃香はちよつとなあ……」

「え、その、待つ……」

「ごめん、今日はちよつと」

「そ、そんな」

「さよなら。太った桃香……」

「だめえ！！ それだけは絶対にだめえゝゝゝ！！！！」

もはや半狂乱な状態になってしまふ。自慢の長髪が乱れてぼさぼさになる。下着姿で頭を抱えて叫ぶ。

そのまま苦悩することしばらく。うつむいた顔をあげた桃香の目には覚悟の炎が燃えていた。

「よし、やってやる。絶対にもとにもどってやるんだから！」

（まずは運動しよう。ご飯も減らそう。辛いけど、お菓子も控えよう！）

決意も新たに痩せることを誓う。先ほどの様子から一変、見事に立

ち直った桃香であつた。

だが

「え、詠ちゃん……桃香様、一体どうしちゃったんだろ……」

「さ、さあ。頭がふつとんだってわけじゃなさそうだけど……」

悲鳴というか絶叫を聞きつたメイドである月と詠が、扉の隙間から一部始終を見ていたのだが、もちろん桃香は気付かない。

かくして、桃香のダイエットが始まるのであつた。

その2 桃香編2 青天の霹靂 (後書き)

もう少し続きます。っていうか、桃香のキャラがちがいますかね？
もう少し穏やかにしたほうがいいのか？ とはいえ、女性が太
るという一大事にマイペースでいかれても変な気がするし……。ど
うでしょうかね……

その3 桃香編3 青天の霹靂

決意した桃香の行動は早かった。やや圧迫感を感じる服に袖を通し、執務室に急行する。

「愛紗ちゃん！ お願いがあるの！」

扉を開けて、開口一番に言い放つ。室内にいるのは、愛紗、朱里、雛里と我らが本郷一刀の4人。4人は突如現れたことと、先ほどの意気消沈ぶりがうそのような桃香を見て啞然となった。

「い、いかがいたしましたか？ そ、それと先ほどより気分は、良くなりました、た……か？」

あの愛紗が尻すぼんでしまうほど、今の桃香の迫力は凄まじかった。

「あのね、ど……してもお願いしたいことがあるの！」

「は、はい。な、なんでしょう？」

鬼気迫る様子に、無意識に腰が引けてしまう。

「うん！ 鍛錬に付き合ってほしいの！」

「はあ。鍛錬、ですか？」

「そう。今日からね。模擬戦でもいいし基礎訓練でもいいから」

肩をがっちりと捕まえられ、鼻の頭が触れるくらいの距離である。

しかし、桃香のこの様子に4人は違和感を覚える。桃香は穏やかな性格だし、武芸に秀でているかといえばそうでもなく、鍛錬事態も積極的ではなかったはずだ。先ほどの落ち込み具合もあり、一体何があったのだらうと一同は困惑する。

とはいえ、目には並々ならぬ覚悟が宿っており、いつもこの目をしていただければなあ、などと場違いな思いを抱きつつも愛紗は応える。

「し、しかしですね。今日は、桃香様に見ていただきたい懸案事項が、山のように……」

目線を横に動かせば、執務机には山となった書簡が山脈を築いている。机の横には、未だ茫然としている一刀と、はわわあわわと言っている朱里と雛里がいた。

「大丈夫。それはご主人様が全部やってくれるから！」

「えっ！ 俺に全投げ！？」

いきなり自分の名前が出せたかと思いきや、トンデモ発言を繰り出す桃香に一刀は仰天する。

「ご主人様。お願い、これはご主人様のためでもあるの」

「え、ええ！？ お、俺のため」

「うん。平和に近づいた今、一番求められているのが内政なの。だからね、ご主人様にも早く慣れて一人前になってほしいの！」

「あ、ああ。そうだよな……三国同盟を結んだし、これからが本番だもんね」

「うんうん。そうそう。流石ご主人様！」

桃香の勢いに押されて納得しかけている一刀だが、傍にいる軍師2名の頭脳は冷静であった。

「（……えーと、実は今の桃香様の発言は、そのまま自分にも当てはまるのだけど……）」

「（……多分、今の桃香様には何を言っても無理じゃないかな……？）」

「（……うん。なにせあの愛紗さんですら圧倒されているもんね）」

「（……じゃあ、ご主人様にやってもらう？ けどすごい量だよ。」

とても一人じゃ……）」

「（……！ 待って。これだけの量は今のご主人様1人じゃ無理だよ。そう、1人では……）」

「（……そっか！ そうだよ。誰かが手伝ってあげなきゃいけないよ。誰かが……）」

蜀が誇る2大軍師であり伏竜鳳雛とまで謳われた2人はすぐさま策

を実行する。

「愛紗さん。多分、今の桃香様は考えを改めるとは思えません。ですから、ここはお付き合ひしていただいてよろしいでしょうか」

「し、しかしだな、朱里」

「それに、桃香様を一人にするわけにはいきません。誰か信頼のある者が護衛についておかないと、平和になったとはいえ油断はできません」

「ひ、雛里まで」

てつきり桃香を諫めてくれるかと思っていた軍師2人に、愛紗は難色を示す。本来であれば、桃香と愛紗と一刀の3人で作業する予定であったのだ。これでは一刀を一人にしてしまう。

とはいえ、今の桃香の様子もそうだし、護衛云々も正論なので否定できない。うんうんと頷いている今の桃香をほっとくわけにはいかないのは確かなのだ。

「あ、あのー、こういうのも情けないんだけど、俺1人じゃ多分無理そうなんだけどー……」

愛紗が納得しかけていたところで恐る恐る手が拳がる。確かに、今までいくつか政務をこなしてきたとはいえ、一刀は元が平凡な学生である。どれだけ前向きに捉えようと限界はある。というか、限界は限りなく低く、耐えきれなくなつて脱走というのがオチである。

当然、伏竜鳳雛にはお見通しであり、対策も万全である。

「ですから、私たち2人が御主人様を補佐しますのでご心配なく」

「でも、2人とも自分たちの仕事は大丈夫なのか？」

「はい……この部屋で一緒にやれば問題ないかと。ご主人様はわからなくなつたら、その都度聞いて下さればいつでもお答えしますの
で」

「……うーん、そつか。じゃあ、悪いけどお言葉に甘えさせてもらおうかな」

「「はい。お任せ下さい！」」

一刀も納得し、これで心配の種は無くなつた。

「うん！ それじゃあ、3人とも悪いけどお願いね。それじゃ、愛紗ちゃん行こう！」

「え、あ、ああ。ちよつ、あつ、そんなに手を引つ張らずとも……」
最後までこちらに、というか一刀に視線をやりながらも逆らえずに退室する愛紗を、一刀は苦笑しながら、軍師2人はひそかに手を打ち合わせながら見送った。

「いつくよゝええい！！」

がつんと城の中庭で練習用の木剣が打ち合わされる。受けた木剣を愛紗は余裕を持って弾き、すぐさま反撃する。よほどやる気がみなぎっているのか、最初から桃香の調子は高かった。準備運動ですら、もどかしいのかせつつかれるように模擬戦を始め、普段のおとなしい様子からは考えられないほどの動きであった。常に動きまわっており、その様子はまさに一心不乱というのに相応しかった。

（本来であれば、執務とはいえご主人様と1日中過ごすはずだったのだが……）

内心の憂いとは裏腹に、木剣が大上段から振りかぶられても、斜めに構え、受けるのではなく流れるように受け流す。朝の会議でも漏れてしまったが、実はこれが久しぶりに一刀と過ごせる日であったのだ。

（平和に一步近づいたとはいえ、鍛錬が欠かせないのは事実。しかし、急にどうしたのだろうか……）

平和を第一に考え争いを嫌うのが義姉妹であり蜀の王である桃香だ。あの魏の霸王である曹操こと華琳にも平和を第一に、一步も引かない姿勢を示したほどのものである。今その桃香は、目の前で汗をかきながらも、一生懸命打ち込んでくる。本音を言えば争いごとなど自分たちに任せ、堂々と先頭に立っているだけではないと思っているのだが、こうした鍛錬も決して無駄ではない。何より主がやる気なのだから、それに付き合わずして家臣とは言えない。

「脇が甘いです！ それでは素早い防御に移れません。今度はこちらから攻めますよ！」

一刀と過ごせぬ寂しさと、掴めない桃香の考えを覚えながらも、愛紗は義姉妹として家臣として全力で付き合うことにした。

（うわあ。さすが愛紗ちゃん。す、すごい強さ……きゃあっ！）
内心で愛紗の強さに感服しつつも、防御する剣と動く足は休めないとにかく、動いて動いて動きまくるのだ！

でなければ、痩せることなどできない。

（と、とは言え、ホントに愛紗ちゃんはすごいな……息切れどころか汗一つかいてないや）

下段から迫る鋭い剣筋を、なんとか受け止める。本当はよけるつもりであったのだが、足がうまくいうことを聞かずに受ける形になった。おまけに、柄を握る両手もしびれてきた。まだ、30分も経っていないだろうが、桃香は全身汗だけで体もがくがくであった。それでも、愛紗は手加減せずに迫ってきた。

切っ先あ落ちて昇る、上段から下段の連携を受け、ついに体の限界が来てしまったのか尻もちをついてしまう。そして、喉元にびたりとつきつけられた木剣を前に、桃香は降参した。

「ふええゝ参りましたあゝ」

「ふふ。なかなかの腕前でしたよ。何より、見事な気迫でした」
その綺麗な顔には疲労がたまり汗もびっしょりかいていたが、さすがにいいほど爽やかであった。

「さて、後は軽く体を整えて汗の始末をしましょう。筋肉痛や風邪をひかれては大変です」

「うん、ありがとう」

そう言いながら、座り込む桃香の足を持ち上げ、丹念に揉んでいく。

久しぶりに激しく動いた筋肉はよくほぐしておかなければ、翌日筋肉痛となり下手すれば熱を持って腫れてしまう。ふくらはぎから始まりふとももにかけてまでをゆっくりと揉んでいく。

「ふああゝ効くうゝ」

桃香は痛そうに顔をしかめるが、愛紗は遠慮なく、かつ丁寧に揉んでいく。ゆえに、桃香がこちらをじっと見つめていることに気がつかない。

（むうゝ。やっぱり愛紗ちゃんは綺麗だなゝ……腰はきゅっとくびれてるし、おっぱいも大きいし、無駄な贅肉もないし……）

一番最後の部分が本音なのはいわずもがなである。

（はああゝ、やっぱり運動しているかしていないかの差は大きいよゝ。よしっ！これからどんどん運動して、愛紗ちゃんみたな体になろう！ えいえい、おう！）

「あの……桃香様？ 私の顔何かついておりますか？」

「あつ、えーと。なんでもないよ。愛紗ちゃん。さあ、次は街を歩こう！」

「ええ！ まだ動かれるのですか!？」

「勿論だよ、愛紗ちゃん。翠ちゃんか蒲公英ちゃんがいたら馬で遠乗りもいいかも。あ、明日もよろしくね」

「なんとっ！ まさか毎日続けるおつもりで!？」

「それこそ勿論。これからはどんどん運動するからね」

日が昇りそろそろお昼の時間。疲れているはずなのに爽やかな桃香と、反対に汗一つかていないのにどこか茫然とした愛紗であった。

一方、

「ご主人様。お昼ご飯ができましたよ」

「おお！ ありがとな朱里。わざわざ料理までしてくれてごめんな」
「そんな、とんでもない！ 遠慮なく食べてください」

「ん。ありがと。いただきまーす……おおっ、うまい！ さすがは朱里だ」

「えへへへ」

ニコニコの朱里は頭をなでなでされて、ニッコニコとなる。

「あのう、ご主人様……お、お茶です」

「雛里までありがとな……ズズッ。うん、こっちもすごくいい味だ。ありがと」

「あうう」

恥ずかしくて帽子を深くかぶってしまいが、こちらもなでなでしてもらって御満悦である。

「さ、2人とも一緒に食べよう。せつかくの手作りなんだから、冷めないうちにね」

「はい！ いただきしゅう」

2人して噛んでしまい、赤面して俯いてしまいが、一刀はそんな2人を微笑ましく見つめ、朱里と雛里も満更ではない様子。

「さあ、食べ終わったらまた、お仕事ですよ。御主人様」

「うへえ。容赦ないなあ朱里は」

「……大丈夫です。わからない部分はいつでも聞いてください」

「うん。ありがとう雛里。それじゃあ2人とも、頼りにしてるよ」

「はい！！」

こちらは幸せいっぱいのお昼だったとき。

その3 桃香編3〜青天の霹靂〜（後書き）

あれ？ 桃香が主役のはずなのに、朱里さん雛里さんが絶好調でした。なぜでしょう？ 桃香が報われない気が……。なので、次回はもう少し桃香を優遇して書けたらいいなと思います。

桃香編が無事に終わったら、今度は誰にしようかな。

その4 桃香編4〜青天の霹靂〜（前書き）

桃香のダイエットが始まりました。ただ、桃香の出番は少ないです。
ごめんなさい。

その4 桃香編4／青天の霹靂

それから、桃香はひたすらに動き回った。

「うわゝ、すごいすごい！ はやゝい」

「すご……もう紫燕を乗りこなしてる……桃香さまってお姉さま並みに才能あるんじゃない……」

蒲公英と共に遠乗りに出かけ、

「ていつ、やあゝ」

「せい、はっ！ っとお！」

「ほっほ、これはなかなか。焰耶とあれだけし合えるとは」

桔梗が見守る中、焰耶と組み手をし、

「はっはっはー！！ 正義は勝つ！！ では、皆の者さらばだ！！」

「待てい！ 今日こそはお縄についてもらうぞ！ 華蝶仮面！！」

「待って、愛紗ちゃん！ あっち、あっちの路地裏の方見てみて！！」

華蝶仮面を愛紗と共に追いかけてまわし、

「はい璃々、わがままは駄目よ。今日は川で遊ぶか、町でお買い物なのどっちか一つよ」

「……（ま、まずいつ）！ え、えーとね、璃々ちゃん。町に行くなら、あたしがお洋服を買ってあげるよ」

「んゝ……わかったあ。今日は町に行くの。そのかわり、いっぱいお洋服買ってね」

ちよつと危なかったが、璃々や紫苑と町に出かけ、

「ええ！！　今日も桃香出かけちゃったの！？」

「はい……朝一番に、何でも白蓮殿たちと釣りをしに行くとかで」

「はわわわ……　今日もお仕事がいっぱいあるのにどうしよう」

「あわわわ……　さすがに許容量を超えてきてますう」

しわ寄せをくらっている一刀が悲鳴をあげる、などなど。

桃香はひたすらに動き回っていたのであった。

そして、数日後の会議場。この日も桃香は最低限のことだけを言つて、すぐさま退席してしまった。

残された者たちは首をかしげるばかりであった。

「ねえ、さすがに桃香さま、ちよつとおかしくない？」

「そうじゃのう。蒲公英の言う通りじゃな。多少の戯れはかまわんがここまで仕事を疎かになるとは」

「そうねえ。確かに、桃香様はお仕事が得意ではないけど、決してサボったりはしてこなかったもの」

「ああ、紫燕まで乗りこなすしよー。あれは、絶対に生半可な気持ちじゃないぜ」

「しかし、だとしたら一体なんだというのだ！？」

愛紗が懇願にも聞こえる叫びをあげるが、答えを出すものはいない。当然、本人に聞けば一番早いのだが、何度聞いても答えずじまいで、拳げ句が睨まれてしまう始末であった。

そして、皆が難しい顔をしているなか、1人冷静に状況を観察している人物がいた。

（ふむ……さて、どうしたものか）

華蝶仮面こと星である。

普段はぼわんとした雰囲気でも得意でない桃香が、愛紗や鈴々達ですら振り切る華蝶仮面（自分）を追いつめるほどにまでの気合いの入れようには絶対に理由がある。

（尋常ではないが、原因は恐らく主絡みであろう。桃香様があそこまで入れ込む理由は他にあるまいしな……とはいえ、主曰く、避けられている感じがする、というのは一体……）

机に突っ伏す主を朱里と雛里がはわわあわわして励ましているのを見る限り、あまり時間はなさそうだ。

と、ここで星は隣に座っている恋が微妙に不機嫌そうな顔をしているのに気がついた。

「どうした、恋。なにやら虫の居所が悪そうだが？」

「……………逃げられた」

「ん？ 逃げられた？ ひょっとして、桃香様にか？」

「……………（コク）」

どうやら、避けているのは主だけではないようだ。もっと詳しく聞きたいところだが、恋はほとんどしゃべらないので、常に隣にいる音々音に聞いてみることにする。

「桃香殿が恋殿から逃げたか、ですと？ ……ああ、ひょっとして

先日の食堂でのことでしょうか！」

「……………（コクコク）」

「詳しく聞かせてくれないか？」

「恋殿と音々音が2人きりで食事をしていたところに大飯食らいの2人組が来て、仕方ないので一緒に食べてやったのですが、あとから来た桃香殿がそれを見て逃げてしまったのです！ わざわざ恋殿

が席を空けようとしたのにも関わらず！！　これは許し難い所業ですぞー！！」

「ん？　待て待て。大飯ぐらいの2人組とは、鈴々と翠のことか？」

「……他に心当たりがあるですか？」

「いや、いないな」

（ますます、怪しいな。避けているのは恋や音々音だけでなく、翠や鈴々もか。……いや、あるいはこの中の誰か、という可能性もある。普段の桃香様なら誘われたら間違いなく招かれるはずだ）

そういえば、先ほどの話でも2人は出てこなかったし、一緒には行動していないようだ。周りではいろいろと議論が白熱しているようだが、もう少し情報がほしいところである。と、そこで、会議室の扉がゆっくりと開かれた。

「ちょっと、あんたらまだ終わってなかったの」

「あのう……出直した方がいいでしょうか……？」

入ってきたのは、メイド服を着た月と詠であった。手には、水の張った桶と雑巾、それからはたきなどの掃除道具。普段は会議が終わったあと、掃除に来るのが2人の仕事であった。

情報は多いに越したことはない。丁度いいといわんばかりに、皆は桃香について何か知っていることはないかと質問する。すると、自分たちがみた桃香の奇行を話す。

「えーと、よくわからないけど、部屋の中で下着姿のまま頭抱えて踊ってたわ……元に戻れー元に戻れー、って。正直、鬼気迫るものがあってすぐに逃げたけど」

「丁度、桃香様がすぐ落ち込んでいた日のことでした」

思い出したのか月が詠の袖をぎゅっと掴む。掴まれた詠は励ましているが、持っている桶の水が震えている。

「ま、まさか……怪しげな道術に手を出しているんじゃない……」

「馬鹿な！ 桃香様はそんな方ではない！」

「しかしだな！」

さらに白熱し、もはや収集がつかない状態である。が、星を含めた幾人かは思うところがあるのか、冷静に情報を整理すべく落ち着いている。

（落ち込んだ……元に戻れ……動き回る毎日……避けるのは特定の人物のみ……仕事をさぼってまでのこと……）

答えにたどり着けそうだが、あと一歩がほしい。もどかしい思いに駆られるのを他所に周りの議論はもはや喧嘩に近いものになっていた。

「鈴々の方が翠より頭がいいのだ……」

「何言ってやがる。あたしの方がいいに決まってる。」

「ふんだ。何を言ってるのだ。翠はコリンよりも頭よくないくせに！」

「何言ってやがる！ あんな丸く太った犬よかあたしの逞しい紫燕や麒麟たちのほうがよっぽどいいぞ……」

「なにを……！」

「ええい、落ち着け、2人とも。何くだらないことで喧嘩しているのだ」

「っていうか、お姉さま、さすがにそれは無茶苦茶だよ……」

愛紗や蒲公英が諫め、呆れるが2人はすっかり喧嘩状態である。

「ええい！ これ以上話しても仕方ない。不本意だが、なんとか私が聞き出してみる。……ご主人様はそれまで何とか頑張ってください」

「……（ムクツ）りょうかい……（パタツ）」

「はわわわ〜ご主人様しつかりしてください」

「あわわわ〜も、もう少しの辛抱です」

「はぁー、では皆、かいさ」

「ああ、愛紗よ」

結局、進展のないまま解散という流れ……の直前に星が口を開く。

「……なんだ？ 星」

「そう、疲れた顔をするでない。時に先ほどの翠の話だがどう思う？」

「……なんのことだ？」

「なに、コリンと麒麟たちのどちらがいいか、ということだがな、私はコリンの方がいいと思うのが」

「はあっ！？」

「いや、これは賭けてもいいぞ。コリンならきつとこの事態を解決してくれるのではないか？ そうだな……今日にでも月が美しく見える私の特等席で特上のメンマと秘蔵の酒でも……」

「お前まで悪乗りするな！！ 全く、お前は今の事態をどう捉えて」

「おお、怖い怖い。では、自分はこれにて……」

「ええい！ ……ああ、もう！ 各自解散！！」

気苦労の絶えない愛紗の言葉をきっかけに、他の者も星にならって退席する。翠と鈴々は再び口喧嘩を始めてしまうなか、疲れた愛紗は月と詠に掃除を頼んで部屋を後にした。

ただ、何人かは意味深な笑みを浮かべていたのには気づくことができなかった。

その4 桃香編4、青天の霹靂（後書き）

今回は星が大活躍！？ いや、一番は翠か？
もう少し、もう少しだけ続きます。
どうかお付き合ってください。

その5 桃香編5 青天の霹靂 (前書き)

星の意味深なメッセージに気づいたのは一体誰か……

その5 桃香編5 青天の霹靂

会議後の深夜、城壁にて。

「ふむ。やはり、月を肴に飲む酒は格別……おお！ 満月とはまた優雅な……っと」

城壁の上に座り、酒を飲んでいた星が振り向く。そこには、複数の人影がいた。

「ふむ、わしもご相伴に預かろうかの……」

「朱里と雛里は疲れて来れないから、代表してぼくと月だけ来たわ」

「あのう、紫苑さんも璃々ちゃんが一緒に寝たいということで、よろしく願います、と」

酒を持参した桔梗と、白いメイド服姿の詠と月であった。

「さて、ここに来たということは、賭けは私の読み通り、でよろしいかな？」

「ま、あれだけあからさまに言われたら、さすがにね」

「そのようではないかと、薄々感ずいておったからのう」

「やっぱり……桃香様は、その」

「ああ、“太ったこと”を気にしておられるんだろうな」

星が言った途端、周りからはなんとも言えぬ溜息が洩れた。

「大方、毎日のように動き回っておったのもそのためじゃろ」

「ああ。恋を避けていたと言っていたが、あれは食事の誘惑を振り切るためでしょうな。翠や鈴々の2人が加われれば、その量はとんでもないだろう」

「それに、元に戻れーっていうのも、ようは痩せろー、って言うてるようなものね」

「あと、紫苑さんが言っていました。いつも誰かと一緒にお風呂に入ってたのに、しばらくは一人で入っていた、と。あと、璃々ちゃん

が川に行こうって言った時も様子が変わったって。きっと、裸を見られたくはなかったのだと思います」

「そして、もう一点。あの主を避けるどころか、ろくに話すらしなかったこと。まあ、恋する乙女としては太っているのがばれたら幻滅される、と思いますからな。」

「だからじゃろ？ 意味深なことを言っつて、勘のいいものだけを集めた。そうであらう？」

「意外とやさしいところあるじゃない」

「私も、自分がもし太ったら、それはできるだけ内緒にしたいですし」

「はて、なんの事やら？ 私は“ちょっと”変わった酒宴の誘いをしただけですぞ」

あくまでも、これは酒宴であると言い切る星。その様子に、わかっていると言いたげに桔梗がつける。

「そうじゃの。酒の席での話なんぞ。誰も覚えてりやせんからのう」

「……酔っ払いの戯言ってことにするのね。……はあー、めんどくさい」

「詠ちゃん……桃香様のためだし……」

「わかってるって。ここにいるやつだけの秘密でしょ。朱里たちもそれくらいお見通しだろうからね」

「ではでは、さっそく酒を飲みながら、どうするか考えましょう……」

……

「おお、そうじゃの。では……おっとつと」

「えっ！ ちょっと？ 本気で飲むの！？」

「あつう、私お酒は強くないです……」

真実を知った者たちの酒宴は、遅くまで行われた。

その翌日の朝、桃香は相変わらず運動しようとはりきっていた。現在は桔梗や紫苑、璃々と共に軽い体操をしていた。どちらかといえ、はりきっているのは桃香と璃々で、紫苑と桔梗はそれを見守るようにはしていた。

「いゝち、にい、さゝん、し」

「ごお、ろく、しち、はち」

「天の国で行われている“らじお体操”といったか？　これはなかなかいいものよう」

「ええ、のんびりやれるし、璃々や小さな子供たちでもできるしね」
気持ちのよい汗を流した4人は草むらに腰をおろして休憩をとる。

「さあ、今日は何をしようかな。紫苑さんは何かありませんか？」

「んー、そうねえ。……このままゆっくりする、というのはどうかしら？」

「ええっ！　こう、もつと何か動き回るようなことは……？」

「桃香様、体を休めるというのも立派な鍛錬ですぞ。聞けば、毎日のように駆け回っているとか。その心構えは大変よろしい。しかし、それでは気が逸るばかりで体が持ちませぬ」

「ん、で、でも……」

「璃々も今日は桃香お姉ちゃんとのんびりしたい」

紫苑の膝に座っている璃々にまで言われては、仕方がない。流石に一人で動き回るのもつまらない。特に、ここ最近是谁かと一緒に行動していたので尚更である。それに、なんだか、体も少しだるく感じる。確かに慣れない運動の連続で疲れが残っているのかもしれない。

「……うん。それじゃあ、日向ぼっこでもしようか。璃々ちゃん」
「うん」

ニコツつと笑う璃々につられ、桃香もニコリと笑う。その脇では、年長である2人が秘かに安堵の溜め息をついていた。

「（ふう。……痩せたい、というのはわかるが無理をしすぎると本気で体を壊されてしまうからのお。それに、本人にも知らずの内に

疲労を溜めこんでおるようじゃし」

「（ええ。最悪、目的が手段に変わってしまう、なんてことになったら大変ですもの。朝のうちはのんびりしてもらいましょう。それに、私たちもあまり激しい運動は控えたいですし）」

「（紫苑、その発言をするほど、わしらは年をとっておらんじやろうに。耳が痛いぞ）」

「（あら、ごめんなさい。そうね、まだまだ若い子には負けられないわね）」

こうして、桃香たち4人はやさしい朝日を浴びながら、のんびりと過ごすのであった。

仕事があるということで、紫苑たちと別れた桃香はお昼をどうするか思案していた。ぽっちゃりした体に気付いて以来、実は食事の量を極端に減らしているのだ。特に、お肉の類は一切食べていない。（見てしまうと腰回りの別の肉を思い出してしまったためである）そのため常に空腹の状態で、我ながらよく今まで動きまわれたものだと思う。

そして、気がつくと、いつの間にか食堂の前に来ていた。どうやら無意識に足を運んでしまったらしい。お昼を食べるべきかどうか葛藤していると、中から声がかけられた。

「ああ、桃香、丁度いいところに。お昼できたから食べてくでしょ？」

メイド服を着た詠であった。食器を持って準備をしていたらしい。それを見て慌てて答える。

「え、ええ？ い、いや、やっぱり今日はその、いらな……」

「“今日は？” 今日も、でしょ。全く、運動もいいけど最低限は食べないと本気で倒れるかもしれないのよ！」

「あの、それに、今丁度出来上がりだったので、冷めないうちに

召し上がっていただければと……」

そう言つて湯気の立つ点心の籠を持つているのは同じくメイド服の月だ。月の料理はとてもおいしく、腕前は桃香もよく知っていた。奥を覗いてみると、他にもほかほかの白米やいい匂いの汁物もある。桃香は思わずごくりと喉を鳴らす。それと同時に、ぐう、とお腹の虫も鳴いてしまった。

目の前の詠がほれみなさい、と言わんばかりにこちらを見る。

「ほら、好きな分だけでいいから食べて。この食べ物だって、民の税なんだから。無駄にしちゃダメでしょ」

「うう……その通りです。いただきます……」

席に着いた桃香は、少しだけと思いながら点心を一口食べる。続いて、温かい汁物を飲みご飯を食べる。噛めば噛むほど味がする。そして、気がつけば、夢中でかきこんでいた。急ぎすぎたせいか、途中で喉に詰まらせ噎せてしまう。慌てて月からお茶をもらい、なんとか流し込む。

「やっぱり、大分お腹がすいていたのね。あんまり無理したら、それこそ体を壊すわよ」

朝に桔梗から言われたことと同じことを言われてしまう。やはり、自分は少し無理をし過ぎていたのであろうか。

お茶をすすりながら思い返していると、入口からパタパタと誰かがやってきた。とんがり帽子と平たい帽子がひよこつと覗いてきた。

「あのー、お昼ご飯はあるでしょうか？」

「できれば、部屋に持っていける簡単なものがいいのですが……」

やってきた朱里と雛里であった。その注文に月が素早く準備をする。「でしたら、点心をいくつかお持ちしますので、ちょっと待っててください」

月と詠が厨房に引き返したところで、2人は桃香がいるのに気付いて頭を下げた。桃香も、自分の仕事分を2人が引き受けてくれてい

るのを知っているので申し訳なさそうになる。

「ねえ、朱里ちゃん。やっぱり、その、お仕事って溜まってるよね……」

「……はい。その、できれば早めに桃香様にも見てもらいたいものもありまして……」

「それに……ご主人様も大分お疲れのようでして」

「……！　そ、そうだね。ご主人様にもいっぱい迷惑かけているんだよね」

2人は申し訳なさそうにしているが、今回は完全に桃香のわがままである。なにより、一刀にしわ寄せがきていることを聞かされ、申し訳なさでいっぱいになる。

だが、太っている自分を見られたくないし知られたくない。一方で一緒に手伝いをして楽にしてあげたい、という矛盾な気持ちが頭の中をぐるぐると駆け回る。お互いに、申し訳なさそうにしている様子を見て、心底呆れたふうに詠は肩をすくめてやってきた。

「ほら、お茶と点心の準備ができたわ。早く、あいつに持って行きなさいよ」

「あ、ありがとうございます。詠さん。あと、その……桃香様」
籠を受け取った雛里は、言いにくい様子で桃香に向き直る。それを引き継いだのは、朱里であった。

「ご主人様も、桃香様の様子が心配だって、おっしゃってました」

その言葉に、雷を受けたように硬直する桃香。

失礼します、と言って退席する2人をみることもできない。

（私、ご主人様にまで心配かけちゃってるんだ……）

聞かされた事実に、深く自己嫌悪に陥る桃香。

そんな後ろ姿を月と詠が心配そうに見つめるのであった。

その5 桃香編5 青天の霹靂 (後書き)

すいません。今回で終わりませんでした。

今まで必死になって痩せようとしていた桃香ですが、ようやく自身の行動を思い返りました。まあ、何事も夢中になると周りが見えなくなりますからね。

次で桃香編ラストの予定です。最後はやっぱりあの人と……。

みたいな感じです。どうか最後までお付き合いください。

その6 桃香編6、青天の霹靂、終（前書き）

桃香編最終話は、ちょっぴりシリアスな展開も混ざっています。最初はコメディ―チックに仕上げようと思ったのですが、筆が進むにつれてこんな展開に。とはいえ、なるべく恋姫の雰囲気を出すべく努力しましたので。よければお読みください。

その6 桃香編6 青天の霹靂 終

ちゃぼん……

「はあ……」

その夜の浴場にて、桃香は盛大な溜め息を吐いた。

「どうしよう……もう、痩せてるよね……大丈夫だよ。ご主人様……」

自分が太ったと気付いたその日から、痩せるべく徹底的に活動した。ひたすら運動をし、食事の量を減らした。そのおかげで、大分体は細くなっていると思う。しかし、疲労が溜まりお腹もすいているのに無理したせいか、妙にだるい。こうして、お風呂に浸かれば疲れも洗い流せると思ったがどうやら意味はなさそうだ。

「でも、無理言って一人でお風呂に入らせてもらっているしなあ、ブクブク……」

そのまま口元まで湯に沈めぶくぶくさせながら途方に暮れる。

太った姿を見られたくないから、誰とも一緒に入らずにいるが、当然経済的ではない。お湯を沸かすのだって、大量の水と薪に手間がかかるのだ。

ガラガラ……

それに、いくら痩せたって、痩せすぎや筋張った体でも嫌われるかもしれない。でも、ご主人様には心配かけたくないし、すぐに傍へ駆けつけ抱きしめてほしい。耳元で甘い言葉を言っしてほしい。自分の体をほめてほしい。

けど、もしも、もしかしたら、などの嫌な想像しか浮かんでこない。完全に思考が袋小路に迷い込んでしまう。

ちやばん……ざぶざぶ……

「ぶはあつ！……でも、ご主人様には嫌われたくない……」

そう、大前提となるのはこれだ。今の自分にとつて、ご主人様に嫌われてしまつてはもう生きていけない。北郷一刀というのはもはや自分の心と体の全てを占める存在なのである。

「はて、主が桃香様を嫌うなど、天地がひっくり返つてもありえま
すまい」

自分の考えは、何を言っている、といった感じの意見に一笑される。
すぐさま反論する。

「ううん。だつて、ご主人様は愛紗ちゃんたちみたいな魅力的な子
がいいはずだもん」

「それこそ何を言いますか。桃香様とて十分魅力的なお体である
と思いますが？」

「え、本当っ！？ 私の体、魅力的になつてゐる、星ちゃ……ん？」

「ええ。この蜀の家臣であり乙女の一人として不肖、星が保証いた
しましょう。おや、桃香様いかがいたしましたか？ ぱくぱくと口
を開けていては、金魚のようですよ」

突然の闖入者に驚きが過ぎてしまい、うまく口が回らない。

「あ、あれ？ わ、私、今日も一人でつて」

「非効率です。一度に大勢入ればその分、手間も資源も減りますゆ
え」

「い、いつの間に……？」

「おや、これは意外な？ 私は入口から堂々と入りましたぞ」

言うこと全てに返されてしまい、もはや何も言えなくなつてしまふ。
しかし、風呂場に星ちゃんがいて、自分の体を見ているという事実
を確認した途端、恥ずかしさがこみ上げ、腕でお腹を隠し勢いをつ

けて首まで沈んだ。

「せ、せせせ、星ちゃん。そ、そそ、そそその、みみ、見た？」
湯から首だけ出し真っ赤になって訊ねる。

「ええ。桃香様の肢体は元々魅力的ですが、最近はさらに美しくな
っておりますし」

「え？」

てつきり、以前よりふくよかになりましたな、とか、太ったのでは、
みたいに聞かれるかと思っただので、肩すかしをくらってしまう結果
となった。

「聞いておりますぞ。毎日鍛錬を怠らずに、さらにご自身を磨いて
おられるのだと。三国同盟の後となれば気合いが入るのも頷けます。
今後の治世の良し悪しが全てを決めると言っても過言ではありません
ん。まあ、少々政務が滞りがちになっているのはこの際目を瞑りま
しょう。なにせ、全力で行っているのです、横槍を入れるのは無粋
でしょう」

「あ、あはは。うん。そ、そうだよな。……ごめんなさい」

国のために鍛錬している、という風に受け取っている星をだますよ
うで本当に心苦しくなってしまう。ここで、そうではなく自分が瘦
せるために皆に迷惑をかけている、といえればどれだけ楽になれる
だろう。でも、変な意地と下心が働いてしまい、曖昧に答えてしま
い、後悔と羞恥とばれなかった安堵の念で押しつぶされそうだ。だ
が、次の星の言葉で、その全てが霧散する。

「ですが、真に無粋な行為であるのはもっと別の部分でしょうな」

「え……」

「桃香様、最近の行動は、きつとご自身に思うところがあってのこ
とでしょう。ですが、他の者に心配をさせるのはいただけません。」

特に、あなたのことを想っている者は大勢いるのです」

胸を突き刺されるようであった。そうだ、自分は周りが全く見えていなかった。自分のことばかりに夢中になっていた。それも、自分のわがまままで。

「あなたは王なのです。この蜀という多くの民を抱えた一国の主。民を想い、家臣を従え、皆の先頭に立つことこそが王です。後ろを見ずに、ただ突き進むだけの行為は勇敢ではなく蛮勇、あるいは無謀というもの。それでは、真の平和は夢のまた夢」

そうだ、これでは王失格だ。自分の個人的な理由で国を、民を見ていなかった。皆で目指した平和のために、他にもっとすべきことがあったはずなのに。下手すれば、そのまま国の一大事に発展していた可能性もゼロではないのだ。その指摘に、うつむいた顔が真っ青になってしまう。温かい湯に浸かっているのに、体が震えてしまう。

「ですが、国だけを考えてはいけません。当然です。己を幸せにできないものが、どうして国を幸せにできましょうか」

再び挙げられた言葉。自分の心を読んだかのような力強い言葉。顔を上げれば、星ちゃんが微笑みを浮かべている。

「なればこそ、我らを頼ってくださいませ。一人で奔放するのでなく、悩むのではなく。我らと共に、協力し励まし合っていく。これこそが人として、国として、正しい在りようでございましょう」

気がつけば、頬から涙が流れていた。星ちゃんがそっと胸を貸してくれる。ご主人様への不安も、自身の行いの後悔も、全てが涙と共に流れていく。

しばらくして落ち着くと、星ちゃんはゆっくりと体を離し、目を合

わせきた。

「とはいえ、今回の場合は仕方ありません。この度のことは、女性であれば誰しもが口を塞ぎ、右往左往して当然。ましてや、それが恋する乙女であれば尚のこそ」

その言葉を聞いて、思わず口が開く。だが、そつと立てられた人差し指で口を塞ぎ、片目を瞑って笑っている。その笑みは、隠し事をしていた娘の全てを知っていた母親のようでもあり、頼りになる賢しい星ちゃんらしい。

「ご安心を。この事はごく少数しか存じませんし秘匿はもちろん、主や愛紗たちにも預かり知らぬところ。そして、これが一番言いたかったことなのですが……」

やれやれといった感じでかぶりを振るう。困った風に笑っている感じな様子で言ってくれた。たぶん、一番言ってほしかった言葉を。

「我らの主が、そのような事で嫌うはずがないでしょう。もつと自信をお持ちになれ。どのようになっても桃香様は桃香様ですぞ」

その言葉に、桃香は嬉しそうに、本当に嬉しそうに頷いた。

すぐに風呂場からあがった桃香様は、すぐに主のもとへ赴くであろう。その様子が鮮明に思い浮かべることができ、苦笑してしまう。そして、桃香とすれ違うように複数の人影が風呂場にやってきた。

「それで、主にはちゃんと部屋で待っておくようにお伝えできたか？ 朱里に離里よ」

「はい。少々、仕事のし過ぎでお疲れですが大丈夫かと」

「ん……ちゃんと、しばらくは起きているようにともお伝えしました」

「それは重畳。お疲れだったの2人とも。さて、後はのんびりと湯に浸かるとしようかのう。星が紫苑、酒はないかのう。風呂場で飲む酒もまた一興」

「ふう。ぼくや月にまで面倒見せるなんて。全く世話が焼ける王さまね」

「うん……きつと桃香様も不安だったと思うの。だから、詠ちゃんもそんなに言ったら駄目だよ」

「あら、心配無用でしょ。詠ちゃんだって憎からず思っているもの。ふふ、そんなことは月ちゃんが一番よくわかつているかしらね……それと桔梗。お酒などはありません。零したりしたら掃除が大変なんですからね」

にわかに賑やかになる浴場。こうして、真実を知った者たちは、人知れず暗躍しその結果を夜の闇と温かな湯の中に沈めるのであった。

その後、北郷一刀の自室にて。

「本当にごめんなさい！！ ご主人様にいっぱい迷惑かけちゃって……」

「いや、それなら仕方ないよ。それに、星が言ってくれた通り、俺はどんなになっても桃香を嫌いになることなんて絶対にないから。安心してくれ」

「うん……うん」

「ほら、泣かないで……もちろん、綺麗で魅力的な桃香が一番好きだけどね」

「えへへ、それじゃあ今後はもっと気をつけます。いつまでも、

「ご主人様が一番で好きでいられるように、ね」

「ん、ありがとう。でも、俺も本当に心配したんだから」

「ううゝごめんなさい……それと、ありがとう」

「それじゃ、明日からは一緒に仕事だ。桃香がいない間にたくさん溜まっているんだから」

「ひえゝ大変だゝどゝしよゝ」

「俺もできる限り手伝うよ。それと、一緒にお昼も食べに行つて、またこうして一緒に……な」

「ん……ご主人様……」

チュッ

大好きっ！！

その6 桃香編6／青天の霹靂／終（後書き）

星が思った以上に活躍してくれました。最初はこのポジションに愛紗を考えていたのですが、やはり愛紗はやきもち焼きのキャラで一刀とラブラブを中心にしたかったので、星にしました。にしても、星は書いていて非常に書きやすい。シリアスもコメディーも両方ござれのマルチなキャラ。なるべく、原作の雰囲気再現したつもりでしたが、力不足故至らぬ点多々ございますが、寛大な心で読んでいただければと。

これにて桃香編は終了です。次回作の主演は誰にしようか迷っている今日この頃。あと、もう少しサブタイトルもひねりたいなー、とか考えています。

応援よろしくお願いします。

その7 月・詠編 くメイドの看護く（前書き）

前回の桃香編を読まなくても、お話はわかるようにできてます。ですが、少しでも関連している部分もあるので、まだ読んでない方で興味があればぜひ桃香編も。読んで下さった方は、ああ、あそこだな。みたいな感じで思ってください。

月・詠が好きな方、ぜひぜひ読んでみてください。。

あと、若干各キャラ呼称が違ったり、想像でこう呼んでるだろうな、という部分が多々ありますが、ご容赦ください。

その7 月・詠編 くメイドの看護く

これは、魏、呉、蜀による三国同盟からしばらくして、蜀に集まった魏や呉の要人たちがそれぞれの国に帰っていった後の話である。

蜀の中心である成都。その城内にある一刀の部屋に、一刀と彼の次女でありメイドの服を着た月がいた。

「ごほつごほつ……はは、すまないな、月。こんなことさせちゃつて」

「いいえ。気にしないでください。お次は背中を拭きますので」

「ああ、頼むよ」

「はい。お任せ下さい」

一刀に頼まれ、笑顔で応じる月。その姿は、仕える幸せを知った恋する乙女の様子であった。

現在、一刀は上半身裸で後ろを向きながら寝台に座っており、月はお湯で濡らした手拭いでその背中を拭いているところであった。

「ごほごほつ……あー、桃香たちにも伝えないと」

「あ、大丈夫です。今、詠ちゃんも桃香様たちにお伝えしているの
で、ご主人様はゆっくり休んでいてください。……はい、終わりました。こちらに替えの服がありますので」

「あー、ありがとう……はあ、体がだるいし節々が痛い……」

「あ……でしたら、お着せしますよ。では、ゆっくりでいいので腕をあげてください」

「ほんと申し訳ない」

のろのろと腕を上げ、動き全体が緩慢になっている一刀は、月に優

しい手つきで丁寧に着せていってもらう。汗も拭いてもらい、清潔な服を着たことで幾分さっぱりとした気分になるが、頭には未だ重たい物が入っているような鈍痛がする。

「はあ……まさか、風邪をひくとはなあ……ごほつごほつ……」

そう、一刀は風邪をひいてしまったのだ。どうやら昨晚、風呂上がりの直後に闇で頑張りすぎたのがいけなかったらしい。連日の政務の疲れも合わさって、翌朝見事に風邪を引いて今に至る。ちなみに、闇のお相手は目の前の月と、ここにはいない詠のメイド2人である。2人にうつらなかつたのが不幸中の幸いであつた。

「……ご主人様、早く布団に戻ってください。風邪の時は、温かくして休むのが大事ですよ」

「あ、ああ。すまない。それじゃあ、しばらく横にならせてもらつよ」

これ以上、月に心配をかけるわけにもいかないので、枕に頭を沈めた一刀は目を瞑る。すると、風邪で弱つた頭はすぐに睡魔に襲われ、そのまま静かに寝息をたてるのであつた。

「ふう。ご主人様、ぐっすり眠れているみたい。よかった……」

布団で眠れている主人を見て、月は自分のことのように喜んだが、苦しそうに赤らんだ顔を見てすぐに不安な気持ちになってしまう。月にとって、一刀は恋する男というだけではなく、命の恩人でもあるのだ。帝の権力争いに巻き込まれ、傀儡となってしまった自分を親友と共に救ってくれたのが一刀であつた。もし、最初に見つけてくれたのが一刀ではなかったら、その場で処刑され命はなかったは

ずだ。その後、安全のため名前を捨ててしまうことになってしまったが、自分たちのことを心配してくれた上に、敵であったのにも関わらず傍に置いてくれた一刀のことを考えれば真名で呼ばれることに不満などあるわけがなかった。一刀を想う気持ちはいつしか恋へと変わり、それが親友である詠と同じ気持ちであつたのを機に、一緒に夜を共にした。

とはいえ、詠の方は何かと一刀につかみかかってしまうが、それが一刀を想うのと自分を大事にしてくれる気持ちの裏返しだとわかっているの、あまり気にしていない。たまに、平気で殴ったり大声で罵倒したりするのはどうかとも思うけど。

「早くよくなつて下さいね。ご主人様……」

寝台の傍らに座りながら、濡れた水で絞った手ぬぐいを額に乗せ、熱いであろう顔に浮く小さな汗の玉を拭いていく。すると、後ろで扉が開いた音がした。振り返ると、そこにいたのは月の親友であり、同じメイド服を着た詠であつた。よく見ると、疲れ果てたような顔をしている。

「ふう……説明するだけなのになんでこんなに疲れるんだろう」

月とおそろいのメイド服だが、詠のほうが丈が短い。月は膝下までに対し、詠は膝上のふともも半ばまでしかない。初めて着たとき、詠は動きやすくていいと言っていたが、違う理由を訊ねたときに、俺の趣味だ！ と豪語した一刀をぐーで殴ったこともあつた。

「へう……どうしたの詠ちゃん？ 何か問題でもあつた？」

「問題も何もあつたもんじゃないわ……それで、そっちはどう？」

「今はぐっすり眠ってるよ。ただ、少し熱が高いみたいだから注意しないと……」

「ふん、昨日あれだけ腰振っておいて倒れるなんて。全く、自業自得よ」

「あうう、詠ちゃん……」

「うっ、ゆ、月。そ、そんな目で見ないでよ……うっ、そりゃ、まあぼくたちも、その、き、気持ちい……って、違う！ 違うからね！ うん！」

「え、詠ちゃん声が大きいよ……」

そう言いながら、同じように月の傍らに椅子を持ってきた詠はよっこらしよ、と言いながら深く腰を落とす。悪態をつきながらも、寝ている一刀を見る目には、心配の色がありありと浮かんでいるのだが、素直じゃない親友はそのことを認めないだろう。額に浮いた僅かな汗を拭いてあげながら、月は何があつたかを訊ねた。

その7 月・詠編 くメイドの看護く（後書き）

月や詠はお気に入りキャラですが、いかんせん、特に詠を書くのがここまで難しいとは……デレ要素が！ デレ要素の塩梅がわからない……

まだまだ、駄文、誤字脱字、これキャラ違っただろ、などありますが、寛大な心で読んでいただけたらと。感想や意見もぜひ！

その8 月・詠編2／メイドの看護

会議室にて。

『ええー！！ ご主人様が倒れた！！ それで、ご主人様は大丈夫なの、ねえ！？』

『落ち着いてください。桃香様。……それで、どうなんだ、詠。ご主人様の容態は？ 無事か？ 何かいる物は！ いや、すぐに看病に行かねば……』

『お主が先に落ち着け、愛紗。とはいえ、どうなのだ詠よ？ 主の具合は？』

『言い方が悪かったわね。そこまで心配する事じゃないわ。ぼくのみた感じじゃただの風邪よ。ただ、若干熱は高いみたいだけど。』
『なんだ。ただの風邪か。んじゃ後で、皆でお見舞いにでもいつてやろうぜ』

『翠の言うとおりなのだ。きっとたくさん食べればおにちゃんはすぐによくなるのだ。鈴々、いっっぱいおいしい物を持っていくのだ』

『……………恋も行く。ご主人様、心配』

『恋殿がいくのであればねねも行きますぞ。……まあ、あいつのためというのがちよつと氣にくわないのですが』

『あつ、ちなみに、看病は必要ないわ。あと、見舞いも……………つて、ちよ、ちよつと待ちなさい！ なにほとんどこつち向いて殺氣を出してんのよ！？ ちゃ、ちゃんと理由があるんだってば！』

『む。あつ、さては、ご主人様の看病を一人占めする気だな。あ、でも、月もいっしょだから二人占め？』

『ふん。あんなやつを気にする必要はない』

『まあ、焰耶よ。そう言うでない。蒲公英も皆も、まずは詠の話を聞くべきじゃろうに』

『そうね。と言っても、私には心当たりがあるんだけど……………誰かが

うつつたら問題だから、でしょ？ 璃々が風邪引いた時も、周りの人にうつつて大変だったのを覚えているわ」

「……ありがとう、紫苑。ほんと助かったわ。ん、まあ、そういうこと。あんたらは蜀の要人なんだから、うつつたりしたら政務に直接影響が出るわ。あいつの場合は桃香がいるから大丈夫だと思うけど……。とにかく、うつつたら大変だから看病はぼくと月でやるわ……。で、朱里に雛里。あんたらはさっきから下向いて何読んでるの？」

「はわわわわっ！？ いえ、これは、その、医療に関する本で決して怪しいものではありませんよ！？」

「あわわわわ……。は、はい。刺せばたちまち元氣抜群になる針とかで、元が房中術用などでは決してないです」

「語るに落ちてるわよ。言っとくけど、そんな怪しいのはやつちゃ駄目……。つて、あんたら、ひよつとしてそれを実践しているんじゃない？」

「……」

「と、とと、とにかく！ ご主人様の部屋には行かないほうがいいんですね！ わかりました！」

「……あつ、でもお見舞いの品を持っていくくらいなら、その、大丈夫でしょうか……？」

「んー、まあそれくらいならいいわ。けど、自分の仕事が終わってないのに来るのは厳禁よ。それじゃ、見舞い禁止の意味がないからね。わかった？」

「『はい』『はい』『はい』」

「それじゃ、ぼくは戻るわ。何かあったらまた伝えるから」

「よろしくね。詠ちゃん。ご主人様のこと頼んだからね」

「ん。わかってるわ」

「つてなことがあったわけ。全く、こいつ一人が倒れただけで大騒ぎなんて……。この国の行く末が不安だわ」

「それだけ、皆心配してるんだよ、ご主人様の事……。私だって心配

だもの。詠ちゃんもそうでしょう？」

「ま、まあ確かに心配はしてるわよ。だけどね、月。それで月まで風邪ひいたらばくはやだからね。無理は駄目よ。それに……」

「ご主人様も望んでないだろうしね。きつと、それなら放っておいてくれ、って言いそうなもの」

「まあ、ぼくたちの立場からすれば別にかまわないんだけどね。こいつはそんなことおかまいなしだからね」

「そうだよな。詠ちゃんが風邪ひいたら、すごく心配するよ、ご主人様は」

「……ふん。げ、原因はこいつなんだから、お礼なんて言わないけどね」

と言いつつ、詠は顔が赤くなっていくのを自覚する。周りにいるのが、月だけだからこそこの態度だ。他の人間がいたら、意地でもこんな赤面した姿は見せない。

それほど、月のことを信頼しているし、まあ、こいつのこともそんなに悪く思っているわけではない。こいつにそれを言うつもりは毛頭ないが。

「それじゃあ、手分けして看病しよう。私は、ご飯つくってくるね。何か食べないとお腹もすくだろうし」

「ん、わかった。ぼくは部屋の換気とか、あとはこいつの様子をみるとく。……うわ、こんなに汗かいてる。全くもう……」

どうやら思った以上に、具合は芳しくないようだ。手拭いで拭いてやりながら、ますます心配になる。額の手ぬぐいも既に温くなっている。少なくとも、暇になることはなさそうだ。

慣れない手つきで看病している様子を、月が微笑みながら見ていたことに、一生懸命手ぬぐいを水で絞っている詠は気づかなかった。

その8 月・詠編2〜メイドの看護〜（後書き）

詠はデレ過ぎでしょうか？ もっと、ツンツンさせたほうがいいのかな？

でも、いちゃいちゃさせたいしなあ……

塩梅がほんと難しいです。

その9 月・詠編3〜メイドの看護〜（前書き）

今回は月のターン

その9 月・詠編3〜メイドの看護〜

お昼になり、厨房で昼ごはんを作っていた月が戻ってきた。手には大きめの土鍋と小皿が3つと、お茶の入った瓶をお盆の上においている。扉を開けたまま、月が中に入るのを確認して詠は扉を閉める。机にお盆を載せながら、月は訊ねる。

「詠ちゃん。もう誰か来た？」

「うっん。まだ誰も来てないわ。このまへの桃香の“あの”騒動もあつて仕事が忙しいんじゃないかな？」

「ふふ、そっか。それで、ご主人様はどう？」

「相変わらず寝たまんま。そろそろ起きるんじゃないかな」

などと言って、そろつて一刀の方を見てみると……目があつた。ぼんやりとこちらを見ている一刀の目に。ばっちりと。

「……や、おはよ」

そう言いながら、気だるそうに腕を使い上半身を起こそう一刀。が、腕に力が入らないのか支えきれずに崩れ落ちてしまふ。それを見た詠と月はすぐさま駆けつける。

「ご、ご主人様！ だ、大丈夫ですか！？ 今起こします！ うんしょっ……詠ちゃんそっちを支えてもらつていい？」

「わ、わかった。ほら、いくわよ。せーのっ！」

非力な少女である月と詠は、2人がかりでなんとか一刀の体を支える。そして、左右から背中を手で支え脇に腕を通して上半身を持ち上げる。触れる腕に熱い体温を感じながら、2人はなんとか一刀の

背中を寝台にもたれさせる。もちろん、背中が痛くないように枕を差し込むのも忘れない。

「はは、ごめんな。詠、月。情けないけど、全然力が入らないんだ。まるで蛸になった気分だよ」

冗談を言いながら、笑う一刀だがその顔はまだ赤く、汗もかいている。けれども、朝の様子に比べれば幾分か楽そうであった。その様子に、月は安堵の息を漏らす。

「月、水はあるかな？　すごく喉が乾いてさ」

「あ、こちらに水差しがありますから……どうぞ、口を開けてください」

「あ、いや、さすがに飲ませてもらうのは……何か恥ずかしいし」
「あんた、自分の状態を確認してからいいなさい。腕に力入らないんでしょ。全く、ありがたく飲ませてもらいなさい」

気恥かしいのだが、まったくもってその通りなので、反論できない。大人しく月が差し出してくれる水差しを口を含む。すると、冷たすぎない丁度いい温度の水が喉を潤す。すぐ目の前には優しく微笑んでくれる月が、ゆっくりと傾けてくれる。ごくごくと喉を鳴らし、気がつけば水差しの水を全て飲み干していた。

「ありがとう。月」

率直に感謝され笑顔を向けられた月は照れてしまい、風邪とは違う意味で赤くなってしまった。

「い、いいえ。これくらいなら。ところでご主人様、食欲の方はありますか？　一応、ご飯の用意はしてあるんですけど……」

「正直、あんまりないんだけど」

「無理する必要はないわ。ただ、少しは食べないと体がもたないから、お皿一杯分だけでも食べるべきよ」

「そっか。それじゃあ、少しだけだけといただこうかな。月が作ってくれたの？」

「は、はい。その、お粥ですけどお口に合えばいいんですが……」

「大丈夫よ。月の食べ物がおいしくないはずないでしょ。あんただってそう思うでしょ」

「ああ。もちろんだ。喜んでいただくよ」

2人から惜しみない称賛をもらい、さらに照れてしまった月はごまかすように準備を始める。お盆ごと土鍋を持ってきて蓋を開けると湯気とおいしそうな匂いが立ち込める。中には、卵と少量の塩を混ぜたお米に刻んだネギをのせたお粥が湯気を立てている。

その匂いを嗅いだ一刀は、病床の身ながら食欲が湧いてくるのを感じた。

月はそれを小皿にわけ、レンゲで掬ってからゆっくりと一刀の口元に持っていく。

「へうへ。それじゃあ、ご主人様、その……あーん……」

照れもあり、夢中になってやってしまったが、これはものすごく大胆な行為なんじゃないかと気付く月。とはいえ、いまさら伸ばした手を引つ込めるわけにはいかない。

一刀の方も恥ずかしいが、一生懸命自分の世話を焼いてくれる月を放ってはおけない。口を開けて租借しようとするが、思った以上にお粥はまだ熱く、噎せてしまう。

「あちっ！ はふはふはふ……」

「あ、ほら。これお茶お茶」

詠が差し出してくれたお茶を慌てて流し込む一刀。少し喉に熱さを感じるが、問題はないようだ。が、月はひどく慌てた様子でこちらを覗きこんでくる。おろおろとする月を一刀はやりわりと落ち着かせる。

「ご、ごめんなさい。私ったら……」

「いいから、大丈夫だよ。それより、もう一口もらえるかな？」

熱で苦しいのに、それでも笑って自分を励ましてくれる一刀のやさしさに月は涙ぐんでしまう。

「あ、は、はい！ 今度はちゃんと冷ましますから」

すくったレンゲを自分の口元にやり

「ふ……ふ……はい。どうぞ、あーん……」

あーんと開けた口に程よい熱さのお粥が流れ込んでくる。その味は、卵と塩がお米に絶妙にマッチしており、柔らかさも丁度よくできた最高のお粥であった。

「うん。すごくおいしい。さすが月だね。」

仕える主人、そして愛する男性から最大の賛辞をもらい月は嬉しさでいっぱいであった。

その後、結局一刀は少し残してしまったが、余りは月と詠でいただいたので土鍋はすっかりからっぽになった。その後、3人で他愛もない話をしながら穏やかな時間を過ごすことができた。

一刀が風邪で倒れている状況で不謹慎だが、今すごく幸せを感じて

いる月であつた。

その9 月・詠編3〜メイドの看護〜（後書き）

結構、月に大胆な行動をさせてみました。

が、実力不足ゆえに月の魅力を存分に引き出せなかった……悔しいです。月のかわいさはこんなものではないはず!!

要反省目指せ能力向上!

次で月・詠編はラストの予定です。

さて、その次は誰にするべきか……

その10 月・詠編4〜メイドの看護〜終（前書き）

今度は詠のターンです。

その10 月・詠編4／メイドの看護／終

月がお盆を戻しに部屋を出て、部屋には再び詠と一刀の2人だけとなった。一刀は先ほどよりも顔色は良く、熱も下がっているようだ。ただ、熱い物を食べた後のせいかな、顔には汗をかいている。それに気付いた詠は、すぐに手ぬぐいを濡らした。

「ほら、あんたまた汗かいてるわよ。じっとして……（じしじし）」

「わっ、ふふ、く、くすぐりたいな」

「いいから、ほら。口元も汚れてるわよ。全くもっ……（じしじし）」

「むがむがが」

「……はい、終わったわよ」

「ん、ありがとう。詠」

「っ！……（カー／／／／）」

顔を拭いていたため、ばつちりと近くで目が合ってしまい、詠は逃げ出したいほど恥ずかしくなった。そのせいだろ。照れ隠しのせいか、妙な言動をとってしまったのは。

「ほ、ほら！ そんなのいいから。そ、そうだ。あんた、体も汗かいてるでしょ！ ふ、服を脱ぎなさい！ ぼぼ、ぼくが拭いてあげるから！！」

自分でもなぜこんなことを言ってしまったのかわからない。別にそこまで世話を焼く必要はないし、こいつもある程度回復しているのだから自分にやらせればいいのだ。けど、月に嬉しそうに食べさせられているこいつを見ていたら、居ても立ってもいられなくなった。けど、これが自分の仕事なのだ！ 決して、寂しくなったとか、月

がうらやましくなつたのではない！ 断じてない！！ そう。これは、仕方なくやってやるのだ。そう思ったのだが、次の一言で全てが弾け飛んだ。

「あー、でも、朝起きた時、月にやってもらつたから大丈夫かな」

何？ 月にやってもらつた？ ぼくがせっかくやってやろうとした事を、既にやってもらつた。しかも月に。月はきつと見たのだろう。こいつの背中を。武人ほどではないだろうが、たくましく、筋肉で覆われた力強い後ろ姿を。天の御使いとして、重いモノを背負つてきた男の背中を。何度も、閨を共にしたのだ。今更、こいつの裸体をみることにためらいはない。ないのだ。よって、恐れもためらいもないのだ。普段の論理的な自分とは違う、かけ離れた行動力だと、頭の片隅で思った。が、思っただけで拒もうとはしなかった。

「ええい！！ ほら、いいから脱ぎなさい！！ 上も！ あと下も！！」

「ええっ！？ 下つてズボンも！？ ちょ、ちょ、さすがにそれはまずいって！？」

「ああ、もううるさい！！ 月にだってやってもらつたんでしょ。だつたら、ぼくもやってやるって言つてんの」

「ちょ、ちよっと！！ あー、駄目だー体がだるいー……し、しかし、男の尊厳がー」

「問答無用！！」

病氣もあり先ほどまで寝込んでいた一刀の力では、非力な詠の力にも逆らえない。

詠は布団を剥ぎとり、往生際の悪い一刀を押さえつけるべく、馬乗りになりながら服を脱がしていく。

なので、当然、そんな状況で誰かが“のつく”したって気付くはず

もない。そして、騒ぎは外にまで漏れているので、何かと扉を開ける人に気付くはずもなかった。

がちゃっ

「あのー、ご主人様、一体何……が……はわ、はわわわわ」

「お見舞いに来ま……し、た？ ……あわわわわ」

やってきたのは朱里と雛里であつた。果物を詰めた籠を持っていたが、目の前の光景にとり落としてしまう。

「「あ……」」

詠と一刀の声が重なる。

手拭いを片手に馬乗りになつて脱がせようとする詠と、弱っているのでまともな抵抗ができずになすがままの一刀。見られたのは、よりによつて艶本好色家の2人。その脳内には桃色に満たされているだろうことは、想像に難くない。

「「し、失礼しましたー！！」」

ばたんっ！

きやー！ と言つて速攻で扉を閉める朱里と雛里。詠は慌てて飛び降り扉を開け放つが、小さくなつた2人の後ろ姿しか見えない。今から追いかけても無駄だろう。仕方ないので、誤解を解くのは後にしようとして、声を聞いてしまった。

「……ま、まさか詠さんがあんな積極的な、え、えすえむぶれいというやつを……」

「……ご主人様も抵抗してなかったし、ひよつとしていつもあ

んなことを……」

「……………ま、まさか、あの艶本にあった“うけ”というやつでは……………」

「……………じゃ、じゃあ月さんと詠さんが、その、“せめ”ということに……………」

前言撤回。

今すぐにでも誤解を解かねば禁断の領域にまで妄想しかねない。

というか、ここで止めなければ蜀に自分たちの居場所がなくなる。本気で。

「なんで月まではいつてんのよ！！　こらー待てーーーー！！　誤解だーーーー！！」

「きゃーーーー！！！！」

その後、叫びながら城中を追いかけてこした詠は、なんとか誤解を解くことに成功した。途中、逃げる2人がたまに卑猥な言葉を出すので、その度に絶叫を放ったのだが、なんとか誤魔化せたいと願いたい。

そして、今度掃除するときには朱里たちの部屋にある艶本を全て焼却処分してやろうと心に誓った。

ちなみに、半裸の状態で放置された一刀はしばらくして戻ってきた月に悲鳴を上げられながら介抱されたのだが、病状が悪化したのはいうまでもない。

さらに、そのことで詠が月はおるか愛紗たちにまでお説教をくらうのは当然の帰結でもあった。結局、全員で毎日交代して看病をすることとなり、1週間後、ようやく一刀は無事に回復したのであった。

終

蛇足

「ねー、おかーさん」

「なあに、璃々？」

「“えすえむぷれい”ってなに？」

「……………誰かしら？ 璃々にそんな言葉を教えたのは…

……………」

「……？」

その10 月・詠編4〜メイドの看護〜終（後書き）

とりあえず月・詠編は終わりです。

いかがでしたでしょうか？ 本来ならもっと長くなる予定でしたが、作者の実力と時間が不足しているためこれが現時点での限界でした。

次は誰にしようかなー、と思う今日この頃。

感想、ご指摘、ご提案などあればぜひご一報ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914j/>

真・恋姫†日常

2010年10月10日22時11分発行